

〈実践報告〉

## 小学校での外国語活動と中学校英語の連携を目指して

東 田 彰 子

### 1 はじめに

公立中学校で38年間にわたり英語担当教員であった筆者は、2012年より小学校教諭養成学科において「小学校外国語教育指導法」を担当することとなった。中学校では在任中、文部科学省の示す学習指導要領（文献①）に沿って、英語教育を行ってきた。その経験で感じたことは、日本の英語教育は中学校・高等学校・大学及び社会に出ての実践力に統一感がないという印象である。80年代では文法中心の授業で「書く・読む」中心の授業であったが、学習指導要領も90年代に「聞く・話す」中心に、実際に使える英語を習得させるための授業に変遷していった。筆者自身の指導の方法も徐々にコミュニカティブな英語を教えることに重点を置くようになってきた。ここ10年の動きでは、幼児や小学生に英語を教えることの必要性に焦点があたり、教科外とはいえ小学校で「外国語活動」を行うようになってきている（文献②）。また2020年には小学校3年生から「外国語活動」が義務付けられ、5、6年生では教科として「外国語」を教えることになっている。その準備として来年度には多くの小学校で先行実施を行うこととなっている。今回の学習指導要領の改訂では、5、6年生では「読む・書く」の指導も必須となる。そうなれば今までの中学校1年生の勉強を先取りするのが得策と考える指導法がまかり通る可能性を筆者は危惧する。

このような流れでは、本来の小学校英語教育の目標である、「素地を養う」との見解には程遠くなり、ただの中学校英語の先取りとなるのではないだろうか。中学校の先取りをして文法事項など扱えば、今まで以上に中学校以降の英語教育の中で「英語嫌い」を増やすだけのことになってしまう。このような流れを断ち、本来の主旨に沿って、且つ、小中高とつながる英語教育で効果的な取り組みを進めていくためには、まず小学校、中学校の連携を強め、小学校の基礎学習の上にその後の学習が積み重なるということを、小中の教員がともに共通して認識することが重要と考えた。そのうえで、中学校段階でやるべきことと、小学校外国語活動でやるべきことを、しっかりと分けて考えるということが大切なのではないだろうか。

このような現状を踏まえ、今後の「小学校外国語活動」の展開を考えると小学校教員養成学科に在籍する学生が小学生に英語を教える方法を学ぶことは重要である。いままでは、

ALT や地域人材の外国語を教える指導者に半ば任せていた授業形態であったが、現在の文部科学省の見解では、「学級担任」が主導権をとり授業を行うことがうたわれている。(文献①) そのため、小学校教員養成課程においても、「外国語活動」の授業をする方法を習得する必要がある。筆者は、自信を持って「外国語活動」に対処できる人材を育てることは教員養成の大切なポイントのひとつと考え、授業計画を編成し、実践してきた。今回は、勤務してきた公立中学校での中学生へのアンケートと新聞資料を参考に、小学校と中学校の英語教育の連携の必要性を検討し、若干の考察を加えたので報告する。

## 2 「小学校外国語活動」の実際

日本の外国語教育は 1945 年に新制中学校が出来て以来、中学校から教育が始まった。近年まで日本に住んでいる日本人は、実際に外国語を使う場面が日常生活にはほとんどないのが一般的であった。そのため長い間外国語(英語)教育の中心は文法主義であり実際のコミュニケーションとしての英語習得は遅れをとってきた。

時代を経て、世の中が国際化してきた。日本の子どもたちがこれからの国際社会に活躍できるようにとの目的で「英語教育」が大きく変わろうとしている。文部科学省は小学校、中学校そして高等学校を通じて、英語教育は「英語によるコミュニケーション能力の育成」を第一の目標に掲げている(文献②)。2011 年度からは小学校で 5、6 年生に外国語活動が週 1 時間導入された。中学校でも 2012 年度からは全学年で週 4 時間の授業が行われている。これは「国語」の授業数より多く、中学校で一番授業数の多い教科となった。また高等学校でも「コミュニケーション英語」が共通必修科目となり、今後授業はすべて英語で行うとの基本的構想も計画されている。

ここで述べられている「コミュニケーション能力」について、文部科学省は、2011 年 8 月のコミュニケーション教育推進会議で、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」としている。つまり、そのような伝え合う能力を英語と言う言語を用いても出来るように学校教育において育むことが必要とされるようになった。

それと時期を同じくして 2013 年には政府の教育再生実行会議が小学校英語を正式な教科にすることや、指導開始年齢を引き下げることが提言した。それに伴い 2020 年には小学校 5、6 年生で「外国語」が教科化され、スタートは小学校 3 年生となる(文献②)。

筆者は、その指針を知った時、当初は小学校教員により負担がかかるのではとの懸念を感じた。現在の小学校現場では児童の指導や保護者対応などに追われ、次の日の授業準備さえ

ままならないのが実情だ。そこに新たな外国語教育という未知の分野が導入されることで、小学校教員は益々大変だとの感想を持った。教員の現場を考えたとき、教員に新たな負荷を強いてまで、小学校での「外国語活動」は児童にとって本当に必要なのか、日常生活でほとんど外国人に接する機会もないのに、もっと基本的に学ぶことが小学校にはあるのではないのかとの疑問を持った。小学校英語と中学校英語の連携もうまくいかずこれでいいのか？と心配に思う点も多々あった。

2015年夏、そんな筆者の発想を覆した出来事に会った。所用で東京に行った時のことだ。関西にいるとあまり実感はないが、東京ではもうすでに外国人とのコミュニケーションに英語が必要な場面が日常的にあるようであった。浅草寺付近には多くの外国からの観光客が訪れていた。仲見世通りはもちろん日本人も外国人も多くの観光客で賑わっている。少し裏の路地に入ると、昔ながらの手ぬぐい屋さんがあったので懐かしい思いで店に入った。そこには見たところ70代のおばあさんが店番していた。そこに西洋人らしき二人連れが入ってきた。いろいろ商品を見て、手ぬぐいと切りがみのしおりを購入するらしかった。お勘定する時におばあさんは包み紙に付ける熨斗（のし）について英語で説明を始めた。横で聞いていて、へえそういうふうにするのか！！と感心するような説明をすらすら英語でやっていた。熨斗の説明は「お祝い」「内祝い」「お土産」「感謝」などの言葉を手振りと言葉で流暢な英語で説明していた。しっかり聞いたあとお客さんの外国人たちは「お土産」の熨斗を選んで包んでもらった。英語であいさつを交わし、にっこり笑って満足そうにお店を出て行った。おばあさんは別に変わった様子もなく普通に次の仕事に移っていた。そして次は筆者たちには当然のごとく東京の下町ことばで接客してくれた。浅草や築地、秋葉原など観光名所では日常茶飯事としての外国語コミュニケーションの裾野が広がっているのだと感心した。日常生活に於いて英語でのコミュニケーションが必要な時代がすぐそこまでやってきているのだと実感した出来事だった。

そんなニーズに応え得る「外国語活動」をどのように効果的にすすめるかの提案をしたい。

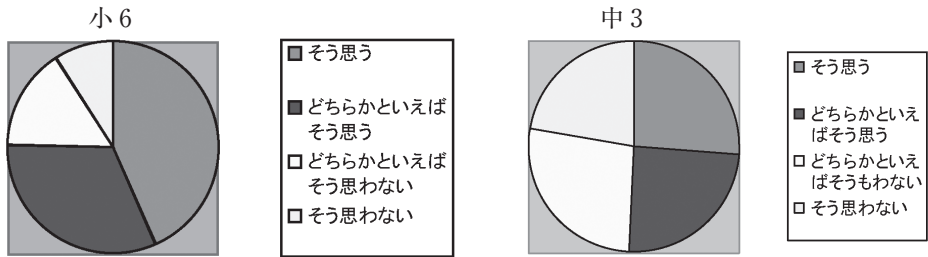
その資料として、以下の新聞記事とアンケートを示す。

### 3 新聞記事より（資料：2013年8月28日 朝日新聞より）

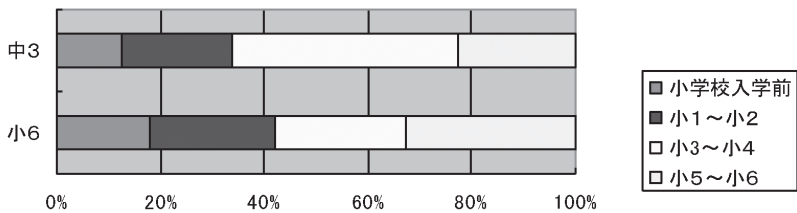
#### 「英語好き 中3より小6」（全国学力調査より）

小学校6年生と中学校3年生に日常の学習や生活習慣について尋ねた。今回英語をめぐる質問をしたところ、下記のように英語を好きな子どもの割合も、留学したい子どもの割合も、小6より中3の方が低いという実態が明らかになった。

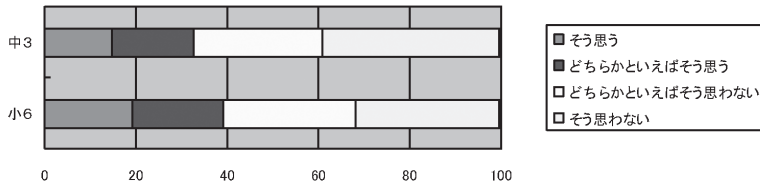
質問① 「英語の学習は好きですか。」



質問② 「英語を学び始めた時期」



質問③ 「外国へ留学したり国際的な仕事についたりしたいか」



「話す」重視の授業を

民間の英会話教室や学校などで英語を学び始めた時期はいつか。そう尋ねると小6の66.8%が「小4まで」と答えた。「小学校入学前」も17.9%、2011年度から小学校5、6年生で外国語（英語）活動が必修になったこともあり、調査時点ではほぼ全員が英語学習を始めていた。これに対し、中3は小4までに始めたのは41.6%、「中1以降」という子ども全体の20%にのぼった。

英語の学習が好きかを聞いたところ、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と答えた子が、小6では76.2%にのぼった。一方、中3は58.3%で、20ポイント近くの差があった。

「外国へ留学したり国際的な仕事についたりしたいか」との間には、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた子の割合が、小6は39.0%。中3は30.8%で、こちらも小6を下回り、「そう思わない」が40%を超えていた。

(上記グラフ・表 参照)

〈東京外語大大学院の根岸雅史教授（英語教育）のコメント〉

「中学校では複雑な文法ルールの勉強が始まり、紙のテストで間違ふことで自己肯定感が低くなる。小学校のように、正確さよりも意思疎通に重点を置いた「話すこと」の指導も必要だ」と話している。

#### 4 中学 1 年生 生徒意識調査

新聞記事を読んで、実際に接している生徒のことを考えてみた。確かに中学校に来ると他教科の勉強やクラブ活動に費やす時間が増し、ゆっくりと自分のことを省みる余裕がないのが実態である。そんな中学生に「英語」教育をするわけであるが、実際に小学校で外国語活動の授業を体験し、入学した生徒は「小学校での外国語教育」にどんな感想を持ったのか、また中学校とのギャップをどのように考えているのかを検証しようと考えた。そこで 2014 年度に教えていた中学 1 年生へアンケートを実施した。

実施時期は平成 26 年 6 月上旬、中学生 242 名中、欠席者を除く 234 名に実施した。

##### 英語アンケート 1 年 234 名

英語の先生たちは、小中学校の英語学習がうまくつながるように研究をしています。研究するための資料として、みなさんにアンケートをお願いしています。下の問いにわかる範囲で答えてください。なお結果内容は先生たちの研究以外には使用しませんので思い当たることを素直に書いてください。

質問項目は以下の通りである。

- (1) あなたは小学校では何年生の時から一週間に何回ぐらい英語を授業で習っていましたか？
- (2) 小学校では英語の時間にはどんな先生が教えてくださっていましたか？
- (3) どんな勉強をしましたか。勉強したものすべてに○をつけてください。
- (4) 小学校の英語は好きでしたか？一番あてはまるものに○をつけてください。
- (5) 中学校の英語を勉強し始めた時、小学校との違いを感じましたか？
- (6) (5) で違いを感じた人は書いてください。どんな場面で違いを感じましたか？

##### 集計結果

- (1) 「あなたは小学校では何年生の時から一週間に何回ぐらい英語を授業で習っていましたか？」

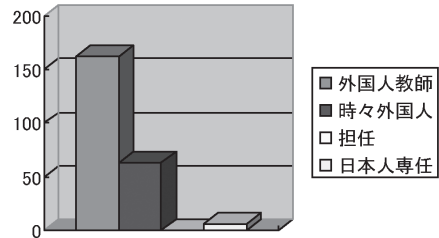
小学校 4 年生から ⇒ 18 人、 5 年生 ⇒ 216 人

一週間に 2 回ぐらい ⇒ 54 人、 1 回ぐらい ⇒ 171 人、 覚えていない ⇒ 9 人

(2) 「小学校では英語の時間にはどんな先生が教えてくださっていましたか?」

- ① いつも外国人の先生に習っていた。(162人)
- ② 時々外国人の先生が教えてくれたが、いつもは担任の先生に習っていた。(63人)
- ③ いつも担任の先生に習っていた。(0人)
- ④ 英語担当の日本人の先生から習っていた。(6人)

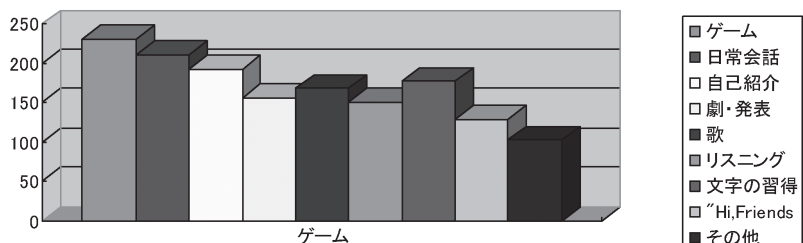
不明⇒3名



(3) 「どんな勉強をしましたか。勉強したものに○をつけてください。」

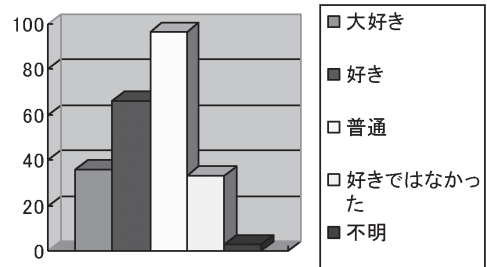
- ① (231人) 英語を使ったゲームをした。
- ② (210人) あいさつなどの日常会話を取り入れた会話を練習した。
- ③ (192人) みんなの前で自己紹介や、スピーチをした。
- ④ (156人) 班やグループで簡単な劇や発表をした。
- ⑤ (168人) 歌を聞いたり歌ったりした。
- ⑥ (150人) 英語の文章を CD 等で聞いたりして、リスニングの勉強をした。
- ⑦ (177人) ローマ字で名前を書いたり、英語のアルファベットを書いたりした。
- ⑧ (129人) "Hi, Friends" を使って勉強した。
- ⑨ ( ) その他⇒思い出す内容を書いてください。(自由記述)

- ・ハロウィーン (お菓子をもらった、ゲームした、仮装して遊んだ ⇒ 24人)
- ・クリスマスカードを作って友だちや家族にプレゼントした ⇒ 42人
- ・お店屋さんごっこをした ⇒ 3人
- ・お花やスポーツを英語で書いた ⇒ 6人
- ・道案内をした ⇒ 9人
- ・外国人の先生が外国の話を英語でして、日本語に通訳した ⇒ 6人
- ・紙芝居をした ⇒ 3人
- ・爆弾ゲームをした。爆弾に当たった人が腹筋 10 回してから自己紹介をした ⇒ 9人



(4) 「小学校の英語は好きでしたか？一番あてはまるものに○をつけて下さい。」

大好き ⇒ 36人    好き ⇒ 66人  
 普通 ⇒ 96人  
 好きではなかった ⇒ 33人  
 不明 ⇒ 3人



(5) 「一番難しい活動はどれですか。」

話す活動 ⇒ 91人  
 読む活動 ⇒ 48人  
 書く活動 ⇒ 78人  
 聞く活動 ⇒ 12人  
 不明 ⇒ 5人



(5) 「中学校の英語を勉強し始めた時、小学校との違いを感じましたか？」

感じた ⇒ 204人  
 感じなかった ⇒ 27人  
 不明 ⇒ 3人



(6) 「(5) で違いを感じた人は書いてください。どんな場面で違いを感じましたか？」

★小学校より中学校が難しく感じるどころ

- ・小学校では習わなかった「書く」授業が中学校ではあり、難しくなった。(27人)
- ・英語のスペルが長くなり、覚えなければならない単語が多くなり難しくなった。(6人)
- ・単語が難しくなり、わからない単語が増えた。(9人)
- ・小学校より覚える単語がいっぱいあって大変だった。(12人)
- ・話す言葉と英文が長くなって難しくなった。(15人)
- ・難しさがぐっと上がって追いつけなくなってしまった。戸惑った。(9人)
- ・小学校では読んだりするだけだったけれど中学校ではノートに英文を書いたり写したりするので難しくなってきた。(9人)
- ・内容が少し難しく濃くなって、わかりにくい場面などが出てきた。
- ・勉強が本格的になった。小学校では単語を書く練習をしていなかったの少し難しく

なった。また小学校では英語の振り返りアンケートだけだったが、中学校ではテストがある。

- ・全くレベルが違いすぎて追いつけなかった。
- ・内容はとても難しくなってきた。
- ・小学校ではローマ字ばかりだったけれど中学校では英語を書くのが難しいと感じた。
- ・小学校では話すことを中心に勉強したが、中学校では書いて勉強することになった。

### ★小学校と中学校でギャップを感じるころ

#### 〈一般的に感じた違い〉

- ・アルファベットを中学校で初めて書いた。
- ・会話する時間が減り、教科書を読んだり、ノートに書いたりする時間が増えた。(18人)
- ・中学校ではくわしい言葉の使い方や単語の意味を教えてくれるところが違う。
- ・中学校では単語をしっかり覚えたりした。代名詞などの意味や使い方を覚えなないといけなくなった。(9人)
- ・小学校は楽しく会話していたけれど中学校では"I am~."など文法が出てきた。
- ・小学校は良く普段に使う会話を中心に習ったが、中学校は文法の基本から始まった。
- ・予習とか(本文のノート整理等のこと)は小学校ではなかったけれど中学校になってからあってびっくりした。
- ・中学校では黒板に絵やカードを貼って授業をした。
- ・会話をする時も小学校では絵を見てしていたが、中学校では教科書を使い、文字を見ることが多かった。
- ・教科書だけでなくノートを使って英文を写したり小テストがあったりした。(12人)
- ・中学校ではテストがあり、1学期の先生は日本人の先生だけだった。
- ・授業の回数が小学校より増えた。
- ・授業の流れは小学校と似ているけれど勉強の内容が結構難しくなった。
- ・宿題が増えた。(6人)

#### 〈小学校の方が良かったと思う意見〉

- ・小学校ではゲームをしたりして遊びの方が多かった。中学校に入り遊びが少なくなりテストのため内容も難しくなった。
- ・小学校では外国人の先生に教えてもらったので感じが変わった。(6人)
- ・小学校ではゲームをする回数が多く楽しかった。(15人)
- ・小学校では英語だけでなくほかの国の言葉も習った。
- ・中学校の先生と外国人の先生との発音の違いが気になった。たまにするゲームも小学校に比べてそこまで楽しくなかった。



#### 〈中学校の方が良いと思う意見〉

- ・小学校より発音などをていねいに教えてくれるところが違うと思った。
- ・小学校の時より中学校の方が楽しい。
- ・小学校では宿題はなかったが、中学校ではある。中学校では授業中にたまにおもしろい事を言って楽しい。中学校ではわからないところを教えてくれるのが良い。
- ・英語を言うのが小学校より多いのが良い。
- ・小学校より日常に使う実用的な英語の会話が多かった。
- ・問題集があったり、ノートに英文を書いたり、本格的に英語を使っている。
- ・小学校では何をやっているか全くわからなかったけれど、中学校ではとてもわかりやすくなった。
- ・前までは意味もわからない英単語が今ではわかってきた。
- ・中学校では授業中に発言ポイントを数えたり、ゲームで頑張ったらシールをくれたりするところが面白い。

#### アンケート結果に対する考察

筆者は、小学校で本格的に英語が導入されて以降では初めて、1年生を担当した。その際、英語授業に対しての生徒の思いを聞くと、「英語の勉強は難しいが大切なので頑張りたい!!」や「英語は好きではない。」と述べる生徒がおり、「英語授業が楽しみ!!」と言って入学してきた生徒が多かった小学校での「外国語活動」がなかった頃と英語授業に対する構えが異なってきている印象を持った。アンケート結果では、小学校での外国語活動に対して「普通」や「あまり好きではない」と答えた生徒は55%と多数を占めていた。現在4小学校から入学しているため、各校の取り組みによって差が影響を与えているとも考えられた。また、小学校では文法構造は学ばずに個々の表現を学ぶことや発音の難しい教科名や職業名なども取り入れていることから、すでに小学校の段階で苦手意識を持つ生徒が出てきているとも推測された。

N市は各小学校に9月～2月まで外国人英語担当の先生（ALT）が配置されている。質問2の結果に示されているとおり、授業内容は、会話やゲームが中心でありALT中心に展開している学校が多いことが示された。質問5の回答にあるように、児童の意識ではリスニング（聞く指導）は単純に聞くだけでいいので苦手意識は少ない。反対にライティング（書く指導）は文部科学省の見解（文献①）では指導しなくていいのだが、ほとんどの小学校で実施されていることがわかった。アンケート結果より「書く」活動はあまり小中での連携ができていないのではないだろうか。英語で書くのはかなり難しいことである上に連携がうまくいっていないので書く事に対して苦手意識を持つ生徒が多くなっていると考えられる。

名前の書き方を例に上げると、小学校ではローマ字を訓令式で教える。これはローマ字も日本語の表記の一種と捉えているので、ヘボン式で教えるのは理にかなわならしい。中学校では英語発音に沿うように、ヘボン式のローマ字を使う。そのため「し=si⇒shi」「ち=ti⇒chi」のように自分の名前の書き方に2通りある生徒がいて混乱を生じる。このような些細なことでも書くことに抵抗を持つ生徒が増えるのではないかと推測される。

次に「Hi, Friends!」の使用が55%と少なかった。ALTが独自の指導方法を持っておられ、その方法に準じている授業が多いからだろう。文部科学省は「教えるのは担任」と銘打ってはいるものの、質問2の結果の通り70%の生徒がALTからのみ授業を受けており、N市ではALTへの依存が多いといえた。

自由記述の内容から、生徒は小中学校の勉強の違いに戸惑っていることが分かった。中学校では早い段階から文法にも触れる。小学校で話すことになれているからと、文字を導入し単語や英文を書くことも以前に比べると大変早い段階から導入する。その上に教科書を使って学習し、読んだり書いたりする作業も確実に取り入れる。そのため小中学校のギャップに悩む生徒が多いという現状が浮き出されてきた。

このような生徒たちの戸惑いに対して、中学校の段階でスムーズに学習習慣をつけさせるにはどうすればいいか。どのように指導すれば生徒の苦手意識を克服できるだろうか。筆者としては、日頃の授業の中で継続的にかつ効果的に繰り返し学習を盛り込む。自己表現の楽しさや家庭学習の重要性を効果的に教え定着させるかを検討し、実践する必要があると考える。

今後小学校での学習がより進んでくると、コミュニケーション能力の開発を目指して小学校と中学校の連携がますます大切になってくるだろう。また小学校の学習を基礎として中学校英語をスムーズに受け入れる移行の方法や両者の体制づくりが大切になってくると思われる。

最後に、前掲の朝日新聞の記事と対比してもほぼ結果が一致した。

「中学校では複雑な文法ルールの勉強が始まり、紙のテストで間違ふことで自己肯定感が低くなる。小学校のように、正確さよりも意思疎通に重点を置いた「話すこと」の指導も必要だ」という見解が筆者の「中学校では早い段階から文法にも触れる。小学校で話すことになれているからと、文字を導入し単語や英文を書くことも以前に比べると大変早い段階から導入する。その上に教科書を使って学習し、読んだり書いたりする作業も確実に取り入れる。そのため小中学校のギャップに悩む生徒が多いという現状が浮き出されてきた。」という見解と一致した。

今後いかに小学校と中学校の連携が必要であるかが大きな課題となるだろう。しかも2020年度には小学校3年生から外国語学習が開始される。その時に「話すこと」の指導からいかにスムーズに「書くこと」へ結び付けていくかも重要課題となるだろう。

## 5 小学校と中学校の連携を目指して

### 1. 小学校と中学校の教材の比較

ここでは、小学校と中学校の学習指導要領を比較し、3, 4 のアンケート結果から、授業形態にギャップが存在し、それに伴い、生徒たちの戸惑いが浮き彫りにされた。それを踏まえて連携の必要性を考察し、それを実践する私案を示したい。

まず、小中の学習指導要領を比較することで問題点を検討したい。

学習指導要領によると

外国語活動（小学校）では・・・外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を計り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う。（文献① 下線は筆者が書き入れた。）

外国語教育（中学校）では・・・外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。（文献① 下線は筆者が書き入れた。）

とある。その文言を解釈すると、小中学校は同じことを教えても構わないということだ。例えば小学校で勉強する文法を整理してみると多くの共通の題材を見つける。2012年より小学校で学ぶ教材として、文部科学省は「Hi Friends!」を配布したが、その内容と中学校の内容とを比較してみる。N市では“New Crown”（三省堂）を使用しているのでその内容と比較してみる。

Hi Friends の内容	学年	“New Crown”（三省堂）の内容
好きなこと・好きなもの	中1 中2 中3	Lesson3 I like~. 好きなものを言う Lesson7 好きなものは何？ Lesson1 My Favorite words
道案内・乗換案内	中1 中2 中3	We're Talking 3 ~はどこですか。 We're Talking 8 どうすれば行けますか We're Talking 1 道案内をしよう
旅行計画・旅行ガイド	中2	We're Talking 8 旅行を楽しもう
買い物	中1 中2	We're Talking 4 いくらですか We're Talking 7 買い物をしよう

外国人・有名人へのインタビュー	中 2	Lesson7 We can change our world
学校生活	中 1	Lesson5 Who is this boy?
世界の国を知ろう	中 2 中 3	Lesson1 Aloha! (ハワイの伝統文化) Lesson6 Uluru (オーストラリアの地域と文化) Lesson8 India, My Country (世界の国を知ろう) Lesson2 Finland- Living with Forests (フィンランド) Use Reed Houses and Lives (中国・モンゴル)
食事	中 2 中 3	Lesson4 Enjoy Sushi We're Talking 6 卵料理はいかがです
宝物	中 1	Let's Read 1 My Treasure
将来の夢	中 2 中 3	Lesson5 My Dream Lesson8 English for Me
学校紹介	中 1	Lesson8 My School Life in America
伝統文化	中 1 中 2 中 3	Lesson3 I play shamisen every day Let's read 1 A Pot of Poison (落語の世界) Lesson3 Rakugo Goes Overseas (落語について) Lesson 5 Houses and Living (日本の文化について)

このように多くの項目で重複している。しかも中学校3年生で学ぶことまで先取りしているのは驚きである。今後の英語教育にはコミュニケーション能力を伸ばすことがキーワードのひとつとなっている。主に小学校では素地を養い、中学校では態度の育成を図る。小学校では会話の素地を身につけるため、実際に起こりうる場面での会話練習をさせる。中学校になればより理論的に難しい表現を取り入れて、自己表現できる力をつける。このように同じ題材でもスパイラルに勉強を重ねることで経験値を増やす方法が小中連携には不可欠である。

## 2. 英語でのコミュニケーション能力を育むために

先に示した文部科学省の定義を集約すると、コミュニケーション能力とは、意欲や関心を持って人と人と交流し、相互の理解を深め合える力であると考えられる。それを、小中学校での連携の元、外国語を習得しながら上の力を培うと考えられると、小学校では「音声・単語・文

法を習得しようとはするが、それ以上に、言葉やジェスチャーを使って相手に思いを伝えようとすることを身につけること。間違っているでもいいから言葉を使って人とつながる心地よさを経験すること」が学習指導要領にある「素地を育てる」ということになると思われる。この力を小学校の時に付けておけば、中学校以降の英語学習にも耐え得る力が身に付き、中学校、高等学校以降での文法学習等へも意欲を保てるのではないだろうか。そのことで、日本語でのコミュニケーション能力が年齢とともに順当に育まれていけば、英語でのコミュニケーション能力も進んでいくと考える。

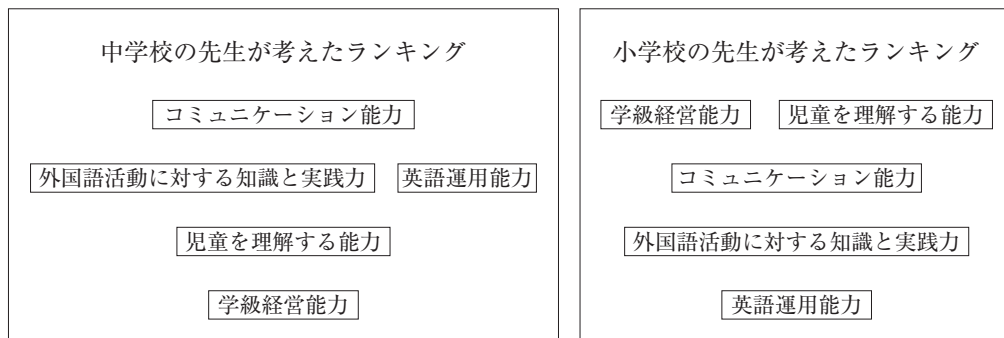
### 3. 連携を踏まえた授業展開の私案

2015年1月24日、兵庫県教職員組合、西宮市教職員組合共催の教科研究会において、小学校の外国語担当教諭と中学校の英語科教諭が、小中学校の連携について話し合い、その席で次の項目で大切にすることのダイヤモンドランキングを行った。

(注、ダイヤモンドランキングとは、コミュニケーションを養うための指導法の一種である。各グループで項目の事項について話し合いどの項目が一番大切かを記録したり、発表しあってお互いの考え方を確認しあう方法である。小中学校の授業や教育現場の研修会などでよく使われている手法である。そして、項目は大阪教育大学 多田玲子教授作成の項目を使用した。)(文献⑤)

項目は以下のとおりである。

- ① 児童を理解する能力
- ② 外国語活動に対する知識と実践力
- ③ 学級経営能力
- ④ 英語運用能力
- ⑤ コミュニケーション能力



小学校教員は学級経営能力を一番に考えていることがみられた。中学校ではコミュニケーション能力と英語運用能力が上位を占めている。ここにも小中学校間のギャップがあると考えられる。文部科学省の見解では小学校で外国語を指導するのは学級担任が主導でというこ

とを前提で進められているのだから、学級経営能力が必要であろう。しかし今後小学校に英語教育が入ってくることを考えると、学校体制で英語運用能力を高めていくという体制作りが必至であるといえる。

それを踏まえて、小中学校の連携期における苦手意識克服のための課題に対する私案を示す。

- ① 小学校での自己紹介活動を生かし、さらに発展させた自己紹介の活動をどのように行うか。

〈具体的な方法（例）〉

- ・ 小学校での自己紹介内容を把握し、小学校で使った単語や表現を知る。小学校での活動を活かしながら表現の幅を広げる授業を展開する。
- ・ 自己紹介カードを作り、新しいことを学ぶたびに項目を付け加え、小学校の段階での自己紹介から発展させる。自己紹介を学級でした時に質疑応答を入れるなど発展的な活動にすすめる。

- ② 音声には慣れていますが、単語や英文を書く事が苦手な生徒に「書く力」を付けるか。

〈具体的な方法（例）〉

- ・ フォニックスを早い段階から導入しアルファベットの音読みを定着させる。その後スペルと発音の関係を教える。
- ・ 自己表現をさせる。自己表現の英文は必ず教師や ALT が添削し自分の間違いを必ず確認して正しいものを発表できるように指導する。
- ・ ゲームやアクティビティーを取り入れ効果的に学習をすすめる。
- ・ 基本となる単語や英文が書けるようになるための教材を用意し家庭学習をすすめる支援をする。
- ・ 単語や基本文の小テストなどで定着できているか自分で確認できるように進める。

- ③ どのようにして三人称単数現在形の使い方を定着させるか。中学校で初めて出てくる3人称の考え方をどのように理解させるか。この文法を習得するかそうでないかがその後の英語習得に必要な不可欠なものである。中学校英語の苦手意識を持たせてしまう第一の難関である。

〈具体的な方法（例）〉

- ・ ICT 機器を使って視覚的に確認できる授業をすすめる。
- ・ 1、2 人称と 3 人称を視覚的に見せ身体を使って身につける練習方式を採用する。

関西大学 田尻吾郎教授の身体を使った習得方法が効果的である。(文献④)

- ・ アクティビティーやゲームを工夫し授業を展開する。インタビューをレポートにまとめるなどアイデアに富んだ授業展開の中で自然に3人称を確認できる工夫をする。そして定着を図る。

従来どの教科においても小学校と中学校の接続部分はあいまいにされてきた。それを打破するにはお互い連携の必要を真に望むことが第一だと考える。中学校教員は小学校でのカリキュラムや指導法を知るために「小学校学習指導要領」を読む。また「Hi Friends!」のみならず、「新学習指導要領」への移行期に扱う、新教材「We Can」などに目を通すことが必要である。また小学校教員もしかりである。この作業は今までは皆無に近いものだったと考える。

両者が外国語活動や英語教育の方向をしっかりと確認した上での情報交換が必要となる。ともに研修を深めることはもとより、授業参観、年間カリキュラムをともに作成する。また評価計画については中学校での実態を知った上で小学校5,6年生の評価方法についてともに研究することは必至のこととなる。

N市ではここ5年ほど中学校英語教育研究会(西宮市教育委員会主催)と小学校の有志の先生方が集まり、「Hi Friends!」の内容を検討しながら研修を進めている。最近では小学校3年生からの学習指導を意識して、「英語教育のカリキュラムやCan Doリスト」の試案作成を試みている。

また「日本児童英語教育学会」の9月例会で発表された、大阪府河内長野市南花台小学校大田三恵子教諭の提案「私の指導プラン」(「時刻をたずねよう～あなたの特別な時刻・命の時刻を教えてください」)(文献⑥)も有効なものと思う。「学級担任、ALT、中学校英語担当教諭」と3者で授業を行う効果的な学習指導法を研究、実践しているとの報告であった。このときにはあくまで学級担任が主導権を握る。お互い授業の流れを作成しアイデアを出し合う。もしALTや中学校教員の提案が、目の前の小学生の実態に即さない場合は、担任の立場として「NO!」と提案をつき返す。この意見には共感した。なぜなら小学校外国語活動の中心的指導者は「学級担任」なのだからである。

多くの課題を持つ小中連携である。単に中学校英語教員が中学校の実態をそのまま早急に小学校高学年に持ち込むことは危険だと思う。あくまでもお互いの現状を把握した上で、「自分たちの教育をどのようにしていくか? そのためにお互いどのように接続していくか」を検討することが第一の大切なことと考える。

長年中学校教師として培ったノウハウを活かしながら、小学校での外国語教育に必要なものは何かを整理し学生に伝えていくために、今後も研鑽を進めていきたい。

### 〈引用文献〉

1. 小学校学習指導要領解説 外国語活動編（平成 20 年 8 月）文部科学省（文献①）
2. 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年 12 月 21 日）文部科学省（文献②）
3. 朝日新聞 2013 年 8 月 28 日 記事
4. 朝日新聞 2013 年 10 月 24 日 記事

### 〈参考文献〉

- ・ 小学校外国語の進め方「ことばの教育として」  
岡 秀夫 ・ 金森 強 編著（成美堂）（文献③）
- ・ 小学校外国語活動 成功させる 55 の秘訣  
金森 強（成美堂）（文献③）
- ・ 学研英語ノートパーフェクト（学研）（文献③）
- ・ 外国語活動の指導法を考える  
泉 恵美子（京都教育大学）  
西宮市立総合教育センター「外国語活動研修」資料 2012 年 8 月 1 日
- ・ 英語教科書本文活用術！  
田尻悟郎（関西大学）（教育出版株式会社）（文献④）
- ・ 指導者に求められる力—教科化を見据えて Talk  
多田 玲子（大阪教育大学）  
第 42 回 JASTEC 研修セミナー 2014 年 8 月 2 日（文献⑤）
- ・ 兵庫県中学校英語教育研究会実践報告集 小学校外国語活動との連携  
西宮の教育実践報告より 2014 年 11 月 10 日
- ・ Talk and Talk（トーク アンド トーク）Book1（正進社）
- ・ New Crown English Series 1~3（三省堂）
- ・ 小学校外国語活動必須にともなう小中連携の在り方（研究レポート）  
高松市八嶋中学校 教諭 山本 弘美
- ・ 「私の指導プラン」（「時刻をたずねよう～あなたの特別な時刻・命の時刻を教えてください」）  
大阪府河内長野市南花台小学校 大田三恵子教諭の提案  
2017 年 9 月 16 日 日本児童英語教育学会（文献⑥）